

提案 地域づくりの高齢人材養成「市立高年大学校」（中学校区に1校）を

60歳以上、3年、高齢期に必要な知識、技術、地域特性を学び、生涯の友を得る

人づくり、仲間づくり、まちづくり

「明治・昭和大合併」での人材養成

*「村立尋常小学校」と「町立新制中学校」

「人づくり」は市町村合併の重要な課題だった。

明治と昭和のふたつの町村大合併のときには、それぞれに新しい自治体が地域発展のための人材養成（教育）を重要な目標の一つとしたことに改めて注目したい。

明治維新後の「明治の大合併」のときには、わが村の「村立尋常小学校」が合併のシンボルとされた。村立小学校は子どもたちに多くの夢を与え、地域を発展させる人材を育成した。その夢はいつしかお国のためとなり、半世紀の後には戦争へと子どもたちを駆り立てていったが。三〇〇～五〇〇戸の規模で教育、戸籍、徴税、土木、救済などが課題だった。

大戦後の「昭和の大合併」のときには、わが町の「町立新制中学校」が合併のシンボルとされた。子どもたちは町立中学校を卒業すると、多くは都会へ出て行って高度成長の担い手となった。八〇〇〇人規模で、新制中学、消防、保健衛生などが共通した課題だった。

さて二一世紀の新時代をめざした「平成の大合併」では、新しい自治体は将来の地域を担う人材を育成するために、何をシンボルとしたらうか。

今回、国（文科省）は、これまでの生涯学習のほかには明確な指針を示さなかったのである。

課題がなかったわけではない。明治の「村立尋常小学校」、昭和の「町立新制中学校」という合併時のステップからいくと、「市立の高等教育機関」であり、それは合併協議の「少子・高齢化」に見合う対策である意味からいって、高齢者が対象の教育機関となるべきものであった。

「市立高年大学校」といった態様のものが想定された。すでに各県・各市には六〇歳以上を対象とする「地域生涯大学校」（高齢者大学校・シニアカレッジなど名称は多様）が開設されていて、高齢人材教育の多様な成果をあげており、本来なら合併協議の場で、文科省が地域自治体の主導において地域発展のために設置を検討するよう指示すべきだったのである。

本稿の使い分けからすると、生涯学習は年齢にかかわりのない「長寿社会」のためであり、「市立高年大学校」は高齢化時代の高齢期（二〇年以上）のための教育機関だったのである。

まことに残念だったのは、平成の市町村合併の先駆を担った地方の自治体にはそういう構想がなかったことである。そして文科省にそういう高齢人材養成を推進する機関を新設する強い意向がなかったことである。

「市立高年大学校」（高齢人材養成センター）

＊地域社会をつくる高齢人材を養成する

市町村合併時に検討すべきどういう構想がありえたのか。

地元の高齢者、地域に帰って過ごす高齢者を対象にする高齢人材養成機関である。対象者は六〇歳以上。これから二〇年以上に及ぶ長い高齢期を安心してすごすための知識・技術を学ぶとともに地域のもつ課題を考える。つまり地域で健康に高齢期を過ごし、その能力をみずからの人生の充実と地域の発展のために活用する高齢人材を養成し、同時に生涯の友人を得るための機会とする施設だったのである。

地域には医療・介護・福祉のための「地域包括支援センター」があり、就労のための「シルバー人材センター」がある。それとともに、「高齢社会」を支える新たな高齢人材を養成する「地域高齢人材養成センター」が構想されて、その中核になるのが「市立高年大学校」なのである。中学校区規模で希望者全員が修学することを目標にして、自治体が運営することになる。

「平成の大合併」時の重要な検討課題であった高齢人材養成なのだが、文科省からその提案はなく、省内に担当する部局もつくらずに過ぎたことを、地域高齢人材養成における欠落として受け止めねばならないだろう。もちろん、これからでも遅くはない緊急課題である。幼児期保育・教育とともに、新たな「長寿社会」に対応する高齢人材養成の教育機関が厚労省・文科省の共管によって検討され、自治体に新設が指示されなければならない時期にある。

ここは一〇年遅延を認めた上で、なお高齢化が進行するわが国の緊急課題として、政府一体での早急な検討と対処が必要だろう。「人生六五年時代」から「人生九〇年時代」への意識変革を促し、高齢者に社会参加を訴えたのは、ほかならぬ内閣府の「新・高齢社会対策大綱」である。六五歳～九〇歳までの二五年の長い「成熟期の人生」を送るに当たっての知識や技術や生涯にわたる友人はお互いの人生を豊かに過ごす必須の条件である。

合併の結果、「個性ある地域の発展」という目標とは裏腹に、往年の特性や精気を失って萎えている地域がみられる。「市立高年大学校」（中学校区）の修学生と卒業生とその周辺の人びとの活気ある取組みが地域社会の活性化に与える影響は測りしれないのである。

新しい「地域社会」が、高齢者のだれにとっても暮らしやすい姿になるためには、地域社会を支える高齢人材の養成は不可欠なのである。

生涯の友と「地域カリキュラム」を学ぶ

＊ 地域特性をまちづくりに活かす

多くの県が「教育立県」を宣言しているのは、何より地元で暮らして地元を豊かにする人材の育成に力を入れているからである。

すでに全国各地で成果をあげている「地域高齢者大学校」（生涯大学校、シニア・カレッジほか名称はさまざま）は、地域活性化を担う人材を養成するために、それぞれに地域性を加味したカリキュラムを構成している。

修学するのは六〇歳をすぎた高齢者。これまでの経験を重ねて「人生九〇年時代」の高齢期人生を見据えて、有意義に過ごすための知識や技術を新たに習得し、生涯の学友を得る。その人びとが地域でいきいきと暮らす姿が増えるために「地域カリキュラム」は重要な要素である。

ここで注目すべき実例として、兵庫県の「いなみ野学園」を見てみよう。

全国に先駆けて一九六九年に開設した四年制高齢者大学校で、六〇歳以上が入学資格。週一回の講義で、学科は園芸、健康づくり、文化、陶芸の四つ。クラブ活動には高齢者らしく、ゴルフ、詩吟、ダンス、盆栽、謡曲、表装、太極拳、ゲートボールなどがある。より専門性をもつリーダー養成の大学院も設置。一九九九年の「国際高齢者年」に「いなみ野宣言」を出している。学科でもクラブ活動でも個人的に夢中になれる教科が重要な要素になっている。

「地域高齢者大学校」は名称もいろいろ。沖縄県は「かりゆし長寿大学校」（一年制）、島根県は「シマネスクくにびき学園」（二年制）、橿原市は「まほろば大学校」（二年制）である。各地で各様の構想で実施されており、東京の世田谷区生涯大学シニア・カレッジ（二年制）、江戸川区総合人生大学（二年制）、成田市生涯大学院（三年制）などではそれぞれに独自の学科とカリキュラムで模索を重ねながら、個人的な能力の開発、地域社会が必要とする多様な能力の養成などの目標を掲げて活動している。

ほかにも栃木県シルバー大学校（二年制）、千葉県生涯大学校（二年制）、鳥取県ことぶき学園（一年制）、長崎県すこやか長寿大学校（二年制）、明石市あかねが丘学園（三年制）、明石市好古学園大学校（四年制）など、それぞれ特徴を活かして開校している。

自治体主導で官民協働の特徴のある「市立高年大学校」（中学校区）の全国展開が、地域創生のために急がれる時期にある。

地方大学は「多重活用」が生き残り策

＊ 子は昼に親は夜に同学親子の談論風発

地方の公立大学は「均衡ある国土の発展」のために、全国どこも共通の同じようなカ

リキュラムを組んできたために地域の特徴を活かすことができないで来た。

だが国の政策が「個性ある地域の発展」へと転回して、地方大学は独自の地域性を取り入れた講座によって変容するチャンスを迎えている。地域経済、地場産業、地方文化・言語・歴史、伝統工芸などといった「地域関連講座」が並ぶことになる。主な受講者はここを「エイジング・イン・プレイス」と定めて人生の第三期を過ごす高齢者である。

地方大学が地域の特徴を採り入れた課程を強化しているのは、時代に即応した生き残りの手法でもあるからだ。早い例では、東京経済大学では二〇〇七年四月からシニア対象の大学院を開講した。立教大学でも開講。早稲田大学は学外キャンパスで開講している。埼玉大学は「充実した第二の人生を埼玉で」ということで夜間コースをシニアに開放した。

地元にもどって高齢期を迎えようとする人びと、高齢期を迎えて新しい知識を求める地域住民の要請に応じて開設するのが、地方大学の「シニア学部」「シニア向けカリキュラム」である。人気テーマには全国から高齢者が勉学にやってくる。長期滞在し、そのまま定住者あるいは永住者になるかもしれない。地域創生にかかわる物産情報・地方文化といった講座は人気になるだろうし、大学は高齢者人材の集積、発信拠点としての機能をはたすことになる。

同じ時期、同じキャンパスで、オヤジやオフクロは夜間の「シニア学部」で人生第三期のための知識や情報と生涯の友人を得る。そしてムスコやムスメは昼間の大学課程で、人生第二期の社会参加のための専門知識を学び、活動期の友人を得るという地方大学の「多重活用」である。

六〇歳をすぎて長い高齢期を視野に入れた「カリキュラム」でスキル・アップして、前職の経験を合わせて「人生の第三期」をめざすオヤジやオフクロや先輩たちの意欲的な姿が、同じキャンパスでグータラに過ごしていた現役学生に与える影響が大いに期待される。

「大学多重活用」のメリットはもうひとつ。「シニア学部」には六〇歳をすぎてなお知識欲の旺盛な人びとが学びにくるわけだから、名誉教授や「シニア教授」のスキル・ブラッシュ、つまり知識のさび止めにも大いに役立つことになる。

『丈人力のススメ 「人生九〇年」時代を前にして』より